



写経の作法について参加者に説明する当院副住職(中央)

形
満

復刊第二十三号

2015年 2月

身延別院発行

〒103-0001

東京都中央区

日本橋小伝馬町3-2

Tel 03-3661-3996

Fax 03-3663-2766

青年会の初企画 若い女性が多数参加

新年写経会

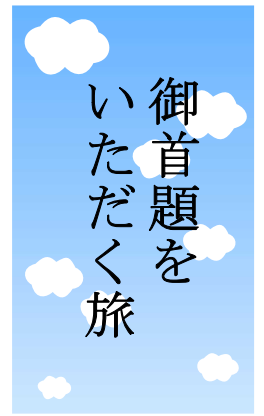
身延別院青年会主催の新年写経会が一月十八日、当院で開かれました。檀信徒さんをはじめ、だれでも気軽に佛寺に足を運んでもらおうと青年会が初めて企画しました。青年会のメンバーがチラシを手渡ししたり、インターネットで呼びかけたりして参加者を募ったところ、約二十人の募集に対して、三十人以上の参加申し込みがありました。

檀信徒さんのほか、当院を初めて訪れるという人の姿もたくさん見られました。また、若い女性の参加者が多かったことも今回の特徴で、写経で心清らかに新年をスタートさせたいという女性たちの関心の高さがうかがえました。

写経には、経典を保存し弘通するための写経と、祈願のための写経があり、前者を蔵経、後者を願経と呼んでいます。願経には巻末に願文を書きます。ただ、私たちが、心清らかに穏やかに取り組みたい場合の写経であれば、願文を書く必要はありません。

この日の写経会は当院地下ホールに机とイスを用意して行われました。参加者は、藤井教祥副住職から、写経の心構えなどの説明を受けた後、写経を始めました。妙法蓮華経如来壽量品第十六のお自我偈が書かれたお手本の上に料紙を置き、面相筆を使って一つ一つの文字を丁寧になぞりました。

厳かな雰囲気の中にも和気あいあいとした気分になった会場で、予定時間の二時間はあっという間に過ぎました。女性参加者からは「次の機会もまた参加したい」といった声があがっていました。(四ページに写真特集) (平山)



第二十三回 大阪府堺市・櫛笥(くしげ)寺

つば日審さまの安産守護のお寺

日蓮宗新聞社が発行している「正法」という年四回発行の雑誌があります。最新号の平成二



昭和四十年に再建された鉄筋二階建ての本堂

十七年お正月号に、大阪府堺市堺区の寺町が紹介されていました。そこにはなんと、南海本線堺駅から歩いていける範囲に十九もの日蓮宗寺院があるではありませんか。「この地域に、こんなに日蓮宗のお寺がまとまっていたなんて！ここなら一度にたくさんのお寺を参拝できそうだ」。

私は、この十九か寺のうち、以前参拝したところのある本山・妙国寺を除く十八か寺を一日で参拝する計画を立てました。一日に十八か寺から御首題をいただくというのは、成就できなかったら、過去最高の数です。参拝したい旨のお手紙を十八か寺に事前にお送りし、前日夜に大阪市内に到着し宿泊。翌朝、堺区に異動して午前八時半から参拝を始めたのでした。

そして六番目に具足山櫛笥寺を訪ねたときのことでした。「あれれ、以前、このようなたまたまのお寺を見たことがあるぞ。あるとすれば、平成二十年二月に本山妙国寺を訪ねた日のはず。しかし、御首題をいただいたかどうかまではどうしても思い出せない」と感じたのです。今回、櫛笥寺では無事に御首題をいただくことができました。

寺伝によれば、明応元年(一四九二年)櫛笥大納言隆朝卿が創建し、本住院日染上人の開山。京都の本山立本寺の末寺ですが、奉行所書付には『京都立本寺と、当地櫛笥寺とは両寺一寺と申す』と記されているのだそうです。朱印寺で、豊臣秀吉は、天正十四年(一五八六年)、一石一斗の朱印を寄せ、徳川幕府がこれ

を引き継ぎました。

また、櫛笥寺に安置している日審上人は、慶長四年(一五九九年)に母親の梅女が懐妊中に亡くなり、お墓の壺棺の中で奇跡的に生まれ、幽霊となった梅女から水飴を与えられ、奇跡の成長を遂げたと伝えられています。成長の後に出家し、日本の富楼那(釈尊の十大弟子中説法の第一人者)と呼ばれ、説教二万余座、帰依する者は九万余人という高僧となりました。櫛笥寺の第八世・中興の祖となり、安産守護の誓いを立てたということです。

さて、堺区内の十八か寺参拝ですが、途中、お寺の皆さんに道案内してもらったり、乗用車で送ってもらったりして、一日で参拝を終えることができました。本当に、皆さんに支えられたことだなあと感激しました。自宅に戻り、御首題帳を調べると、平成二十年二月七日に櫛笥寺から御首題を頂戴しておりました。計画を立てる段階で、数多くまわることにアタマがいつばいで、参拝の記録をすっかり見過ごしていたのでした。(平山徹・新聞記者)



三十人の参加者が心を込めて初の写経体験



地下ホールで行われた新年写経会



真剣に取り組む参加者



最後に参加者全員でお自我偈を一読

主催：身延別院青年会 後援：一般社団法人 居人塾

新年写経会

2015年1月18日(日) 13:00~
(13:00受付、13:30開始、15:30終了)

日本橋 身延別院 (東京都中央区日本橋小伝馬町3-2) にて開催!
写経で心清らかに新年をスタートしませんか? 作法に則り、丁寧にお教えします!

- ◆参加人数: 20名程度
- ◆参加費: 2,000円
(用具・用紙代、祈神料込み。筆、硯、用紙などはご用意致します。手ぶらでお越しください)
- ◆参加資格: どなたでも(宗派不問)
- ◆内容: 写経、新年の御祈願、法話
(書きされたお経に皆様の新年度好運氣のご祈願を致します)

申込締切: 1月13日(火)

お名前・性別・年齢・当日の連絡先を下記のE-mailアドレスにお送りいただく、または申込欄にご記入の上、FAX・郵送などでお申し込み下さい。青年会事務局からの返信をもって申込確定といたします。

身延別院青年会事務局
103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町3-2 身延別院
TEL/FAX 03-3661-3996/03-3663-2766
E-mail fkyosho@mbe.nifty.com
身延別院青年会 Facebook <https://ja-jp.facebook.com/fujikyosho>

「新年写経会」申込欄

カネ		備考欄	
お名前			
性別	男・女	年齢	当日の連絡先
お住まい			E-mail

青年会が作成した「新年写経会」のチラシ

一面でもお伝えしましたように、身延別院で初めての開催となった新年写経会には、定員約二十人を大幅に上回る三十人以上の参加者がありました。宗派不問で、インターネットで呼びかけたのに対し、一般参加者は若い女性の姿が本当に目立ちました。参加者の多くは、写経は初めてという人たちでした。

「写経をするときは、雑念を捨て、ただひたすら書写に心を向けましょう。上手でも下手でも、丁寧に心を込めて書くことが大切です」——そんな藤井教祥副住職のアドバイスに、参加者一人一人が心を集中させ、お自我偈の文字を書いていきました。

お自我偈は法華経如来壽量品のエッセンスとなる部分で、五百十文字から成り立っています。写経会は午後一時半から三時半まででしたが、時間内に仕上げがらなかった人も多く、後日、当院に持ってきた人もありました。

写経会の最後に、参加者全員でお自我偈を一読しました。また、副住職らが、書写したお経に、新年の好運氣のご祈禱を行いました。参加者からは、二回目の写経会を期待する声が次々にあがり、初めでの開催に多くの参加者があったことは、主催の青年会メンバーにとっても望外の喜びで、今後の開催を検討したいとしています。

盛況だった節分会と星祭り

趣向を凝らした豆まきが大好評

身延別院の節分会と星祭りが二月三日に行われました。今年も日本橋小伝馬町の当院には一年の幸福と社会の安穩を願う参詣者がたくさん集まりました。

午後一時から本堂で節分会の法要が営まれ、檀信徒約七十人が参列しました。当院ゆかりの



藤井住職のかけ声で始まった豆まき

お上人がたが法華經の序品、方便品、寿量品、神力偈、観音偈を誦した後、一年の安穩を願って八人の修法師が木剣を手にご祈祷を行いました。

また、藤井住職が豆まきの由来などを解き明かした法話に、参列者の多くが興味深そうに耳を傾けました。豆まきは宇多天皇の時代の八〇〇年後半から九〇〇年前半頃には行われていたと言います、鬼退治に炒った豆をぶつけたことが伝

今年はインスタントラーメンなどもまかれた(写真右)

修法師のご祈祷を受ける参列者(写真下・右)

節分会の準備を済ませた当院(写真下・左)



えられているそうです。

午後一時五十分ごろから豆まきとなり、藤井住職の「除災得幸 福は内」という発声を合図に、年男・年女の檀信徒の皆さんが境内の参詣者に向かって一斉に福豆や福銭をまきました。今回は趣向を凝らし、袋入りのインスタントラーメンや、お菓子などもまかれ、参詣者からは大好評でした。



寺の動き

中山法華経寺と堀之内妙法寺へ初詣



中山法華経寺荒行堂の前で記念撮影

身延別院の檀信徒の一行が一月十日、千葉県市川市の中山法華経寺荒行堂と総武霊園、東京都杉並区の堀之内妙法寺を参拝しました。本年最初の団参で、新春初詣です。

参加したのは藤井教祥副住職はじめ檀信徒の皆さん十四人。一行は午前九時十五分にマイク

ロバスで当院を出発しました。最初に訪れた法華経寺では、荒行堂で全堂代表の東京・本念寺住職浅井信英師が導師となり、ご祈禱を受けました。荒行成満まで一月に迫ったこの時期、法華経寺境内は全国から荒行僧を見舞いに訪れる檀信徒でたいへんな混雑でした。

続いて訪れた総武霊園では当院開山で身延山久遠寺第七十三世法主の文明院日薩上人と、当院初代住職で身延山久遠寺第八十六世法主の一乘院日静上人のお墓をお参りしました。

総武霊園を出発した一行は午後一時三十分堀之内妙法寺に到着。本堂でお開帳を受け、その後、諸堂を案内していただきました。午後三時四十五分には当院に到着しました。



総武霊園でお墓参りをする檀信徒さんたち

岩手・法華寺の一行が当院を団参

岩手県遠野市の法華寺(住職・阿部是秀上人)の檀信徒の皆さん約三十人が昨年十二月七日に、当院を参拝しました。毎年この時期に参拝いただいているものです。

当院と法華寺は縁が深く、住職の阿部上人は当院初代住職の藤井日静上人が身延山法主だったころ、学生として随身をされていました。また、法華寺の開山は当院初代の藤井日静上人です。一行は七日早朝に当院に到着。地下ホールで休憩し、朝食をとった後、本堂でお開帳を受け、当院初代住職一乘院日静上人、二世妙道院日光上人のご回向を行いました。



当院を参拝した岩手県遠野市法華寺の檀信徒の皆さん

豆まき後の福引も大盛況

豆まきの後は、豪華賞品の当たる福引きが本堂で行われました。年男・年女として申し込みを済ませた檀信徒さんを対象に行っている恒例のイベントです。商品は本年も、帝国ホテルペア宿泊券、ネスプレッソ(コーヒーマーカー)などの豪華なものでした。また、伊勢定食事券、商品券、博多烏鍋セットなどの賞品が総代から提供されました。さらに、人形町今半食事券、高級清酒、写経セットといった、お上人からの提供品も並びました。

今年抽選会に先立って、お笑いユニット「ダブルスパム」の新垣栄斗さんがコントを披露。会場の檀信徒さんらを笑いの渦に誘いまし



節分会では、「ダブルスパム」の新垣栄斗さんがお手伝いに加わりました

た。新垣さんは当院の檀家の娘さんの夫というご縁での登場です。抽選会の司会進行も務めた新垣さんが、デジタル抽選機に掲示された番号を読み上げるたび、檀信徒さんたちからは大きな歓声が上がっていました。

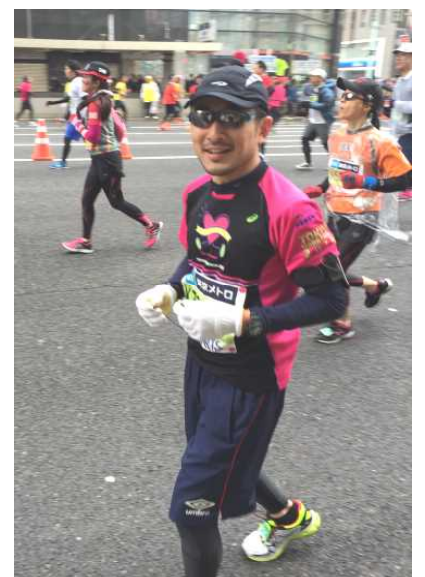
豆入れ奉仕に十七人

身延別院の檀信徒有志が一月十九、二十日、節分会で用いる豆の袋詰めを地下ホールで行いました。今年は大斗五升分の豆が用意されました。参加した檀信徒さんたちは、豆を杯で袋に入れる役、袋をホチキスでとめる役など、役割を分担しながら、手際よく作業を進めていました。事前に準備をしてくれる皆さんのご協力があったからこそ、節分会は二月三日に盛大に行うことができました。豆入れ奉仕にご協力いただいたのは以下の皆さんです。

阿久津喜美子、石渡日出子。伊東精子、今井善子、岡本春雄、岡本つね子、勝見登志子、北村孝子、小島喜恵子、小林聰子、佐竹美智子、鈴木秀子、寺久保トシ子、中田しずえ、林好江、藤井孝子、藤井麻未(敬称略)。ありがとうございました。

当院副住職が東京マラソン完走!

東京都内で二月二十二日に開かれた「東京マラソン2015」に当院の藤井教祥副住職が初参加し、四十二・一九五キロのコースを完走しまし



コレド日本橋前を走る副住職

た。副住職は、一般社団法人日青塾として同マラソンに出場。午前九時十分新宿区の都庁をスタート。千代田区内幸町付近の二十キロ地点を二時間五十五分で通過。江東区有明のゴールを五時間四十分二十秒というタイムで走り抜けました。

今後の予定

三月十八日(水) ～二十四日(火) 春季彼岸会

二十四日(火) 彼岸会施餓鬼法要

午後一時より

四月一日(水) 願満祖師御開帳

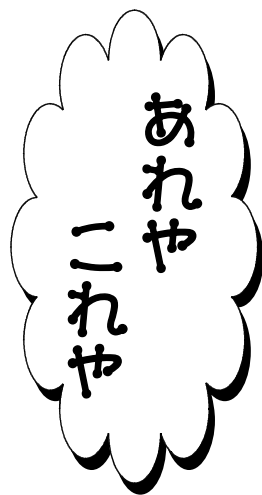
八日(水) 花まつり 終日甘茶供養

十一日(土) 十三日講 法要並法話

午後一時より

十八日(土) 甲子大黒天祭

※『願満』の次回発行はお盆過ぎを予定していません。



妙法蓮華經序品第一
 如是我聞一時佛住天舍城耆闍崛山中與
 大比丘眾萬二千人俱皆是阿羅漢諸漏已
 盡無復煩惱逮得已利盡諸有結心得自在
 其名曰阿若憍陳如摩訶迦葉優樓頻螺迦
 葉伽耶迦葉那提迦葉舍利弗大目犍連摩
 訶迦葉阿菟提摩拘賓那憍梵波提離婆
 多單陀伽婆陵薄拘羅摩訶拘提離難陀孫

『法華經』の漢訳者鳩摩羅什(くまらじゅう) (その一)

今回はユニークな訳経僧、曇無讖(どんむしん)を取り上げたが、今回は私たちが、現在読誦している『妙法蓮華経』の訳者、鳩摩羅什(くまらじゅう)について、特に重要な人物なので、二、三回に分けて紹介しよう。

鳩摩羅什という名は、略して単に羅什とも呼んでいるが、もとはサンスクリット語のクマールラジューヴァを音写したものだ。クマールラは少年、童子という意味、ジューヴァは生命とか、寿命という意味なので、意識して童寿ともいう。

鳩摩羅什の生年、没年には諸説ある。大方の支持を得ている一説を挙げれば、西暦三五〇年に生まれ、四〇九年に示寂したという。羅什のことを記した伝記には、僧祐『出三藏記集』巻十四、南朝梁の慧皎『高僧伝』巻二、唐の房玄齡『晋書』巻九十五、「鳩摩羅什伝」、それに弟子の僧肇の追悼文「鳩摩羅什法師誄(くまらじゅうほっしるい)」(偽作説あり)がある。

さて、羅什は、インド出身の還俗僧、鳩摩炎(クマールヤナ)を父に、龜茲(きじ)国王の妹の耆婆(ジューヴァ)を母として龜茲国(今の中央アジア、クツチャ)に生まれた。インドからクツチャにやってきた僧侶鳩摩炎に、国王の妹の耆婆が一目惚れして、無理矢理還俗させて結婚したという。鳩摩炎はもとインドの或る国の大臣の息子であったが、出家して諸国を巡遊してクツチャに至ったという。国王王家の厚遇を得ていたが、そのような鳩摩炎に国王の妹耆婆が恋したのだと伝える。のちに羅什が生まれ、母子ともども出家してしまうと還俗した彼は居場所もなく、ある時、いずこへか去って行っ

たという。

以後、年譜式に書くと、

三五〇年、誕生。幼少時より母による英才教育を受ける。

三五六六年、数え七歳で母とともに出家した。二年後、九歳で母とインドのカシミールに赴き、小乗の部派、説一切有部(せついつさいうぶ)の槃頭達多(バンドウダッタ)に師事して、三年間の留學生活を送る。

三六一年、十二歳のとき、カシミールより故国への帰途、パミール山中の北山(ほくざん)で、一人の僧から母の耆婆が「この子はもし、三十五歳までに破戒しなかったならば、大いに仏法を起こして無数の人々を度する優婆堀多(うばくつた)となる。もし全うできなかったならば、ただ単に賢い僧で終わるだろう」という予言を受ける。

このエピソードは後の羅什の破戒を暗示していて象徴的である。もちろん、後に伝記編集の際に付加されたものであろう。

羅什と母はカシミールの帰途、疏勒(カシュガル)に一年滞在し、ここで須利耶蘇摩(スーリヤソーマ)と出会って、これまでの小乗仏教から大乘に転向する。主に大乘中観派の論書を研究した。後に中国に迎えられる時に、羅什が中国で紹介した主な大乘論書がこの分野のものである。

三六九年、数え二十歳になり、クツチャの王宮で受戒し、卑摩羅叉(ヴィマラクシヤ)より戒律文献の『十誦律』を学んだ。以後、羅什は仏教修行者としての日々を送ったようであるが、彼の平穩な生活はそれから十数年後に突然に破られる。

三八二年、中国の前秦王苻堅(ふけん)は將軍呂光を派遣し、七万の軍勢によつて龜茲国を攻略し、羅什を捕虜としたのであった。前秦というのは、五胡十六国時代に中国中原の地に侵入した異民族の氏族によつて建国された国で、当時、苻堅を第三代帝王に、長安を都として勢力を振るい、江南の地に亡命政権を立てていた漢人の国、東晋をしばしば脅かしていた。この苻堅が、中国の地にまで名声が届いていた羅什を国師にしようとして、いわば羅什拉致のためにクツチャを攻略したのであった。この続きは次回にしよう。